

尼門跡の音声言語生活資料

— 尼門跡の言語生活の調査研究 (Ⅲ) —

井之口 有 一
堀 井 令以知
中 井 和 子

目 次 (§ 59)

第Ⅲ部 尼門跡の音声言語 生活資料 (§ 60)

は し が き (§ 61)

I 尼門跡の口上 (§ 62)

1. 年始・年末の口上 (§ 63)

(1) 新年のご祝儀申入
れ (§ 64)

〔付2〕 宮中女官の
新年のご祝儀申入
れ (§ 65)

(2) 歳末のご祝儀申入
れ (§ 66)

2. ご遠忌の口上 (§ 67)

3. お悔みの口上 (§ 68)

4. 電話の取次ぎの口上 (§ 69) 5. 訪問者の取次ぎの口上 (§ 70)

6. 進上物の口上 (§ 71)

〔付3〕 宮中女官の献上物の口上 (§ 72)

II 御所ことばの生活を語る (§ 73)

1. 新年三日の御事を語る (§ 74)

2. 御所ことばの生活を語る座談会 (§ 75)

(1) 大聖寺門跡の由緒と御所ことばの概観 (§ 76)

(2) 「ナラシャル」「ゴアシャル」 (§ 77)

(3) 徳大寺公爵の侍従のとき (§ 78)

(4) 宝鏡寺門跡のこと、御所人形を中心に (§ 79) (5) 「オモウサン・オタタサン」 (§ 80)

(6) 曇華院門跡でのあいさつ「ゴキゲンヨウ」 (§ 81)

(7) お供えもの (§ 82)

(8) 「ゴゼン」・「オバン」・「ハン」 (§ 83)

(9) 来客と訪問 (§ 84)

(10) 公家の場合—(1)冷泉家 (§ 85)

(11) 公家の場合—(2)山本家 (§ 86)

(12) 「公家言葉集存」について (§ 87)

(13) 旧堂上の公家ことば (§ 88)

(14) 御所ことば「シャル」「マンシャル」 (§ 89)

(15) 「サン」と「さま」 (§ 90)

(16) むすび (§ 91)

む す び (§ 93)

写真版 ⑦ 大聖寺門跡正門 ⑧ ゴゼンへの新年のご祝儀申入れ ⑨ 進上物の口上



(⑦ 大聖寺門跡正門)

は し が き

本稿は尼門跡の言語生活の調査研究の第3稿に当る。前稿までにおいて、ほぼ尼門跡の言語生活の概要は述べたつもりであるが、実態調査資料や語彙論的研究など、まだ考察の対象としなかった事実もかなり残っている。

本稿では、既述の言語生活の種々相を具体的にとらえ、個別的な場面における言行為をより实际的に究明するために、音声言語生活に関する実態調査の録音を文字化したものを中心に示すことにした。

尼門跡の言語生活資料として、筆者は尼門跡と対談し、その結果をできるかぎり録音し、それらの録音中から、御所ことばの生活をかなり鮮やかにうかがえると判断したものの若干をありのままに文字化し、音声言語生活資料として記載することにした。

このほか、言語生活資料として、前稿で、すでにふれたように、「御日記」(§ 31・35)やお文(書簡, § 58)の新資料をも整理しつつあり、これらは文字言語資料として、次稿以下において掲載し、後に語彙集を掲げ、さらに以上の総合的諸考察をも記す予定にしている。

本稿はもっぱら音声言語資料だけを取扱い、具体的事例を純粋な形で報告することにした。これらの資料を有効に利用することによって、対談の具体的な場における個人の言行為について、御所ことばの生活を送る人々の個別的な語法の特徴、さらに御所ことば使用の言語意識の問題にまで立入ることも可能である。しかし、ここではただ事実の客観性を尊重するという態度で資料を紹介することにとどめた。

本稿に収めた録音の文字化による資料は、次のような内容を含むものである。

主として大聖寺門跡における口上の各種(年始・年末、ご遠忌、お悔み、電話の取次ぎ、訪問者の取次ぎ、進上物など)について、具体的にその実態を示すようにした。さらに、「御所ことばの生活を語る座談会」(§ 73)の全文をも掲げた。前者は御所ことばによって、御所的な生活の種々相を定型化した口上であるが、後者はこれと異なり、座談という自然な話体で表わしたものである。

ただ無形文化財ともいうべき尼門跡について、聞かれるだけのことを聞くという方針のため、一部の事実の重複もやむを得なかった。

なお〔付〕として「宮中女官の追憶談」のうちから、特に年始のあいさつと献上物の口上とを付記した。これは尼門跡使用の御所ことばと宮中女官の御所ことばとを比較し、宮中生活の一端をもうかがいたいと考えたからである。

本稿の各項には、まず「解説」を付け、次に「本文」を示し、最後に「注」を加えることにした。

なおまた、本文中の〔 〕印の中の語句は筆者が補記したもの、「二字あけ」(活字で二字分あけたもの、§ 64—1 参照)は、改行と句点との中間的ポーズとして、便宜使用したものである。

I 尼門跡の口上 (§ 62)

ご宮室系の尼門跡では、御所中心・皇室中心の伝統的なものの考え方が、尼僧生活の隅々まで及んでいる。あいさつ・口上についても、ゴゼン（御前）を中心とする御所風のしきたりが今もなお、尊重・保存されている。

尼門跡における慣習として、外部からの用件は、間接的に、一老^{いちろう}を介してゴゼンに伝達される。一老を仲介とする伝達形式（取次ぎ）は、年始・年末のご祝儀申入れの口上の際、尼僧一同を代表して、一老がゴゼンにお祝いを申入れる場合にもうかがわれる。

そして、一老以下のお次^{つぎ}たちが同輩どうしであいさつ・口上を交わすときと比べて、一老がゴゼンに、代表者として申上げる口上では、謹んで丁寧に述べ、幾度もお辞儀をし、声の調子も自然に小さめに、かしこまったものいいになるという相違がみられる。

またお次どうしのあいさつにも、私的なことよりも、最初にゴゼンのご機嫌についてふれるというしきたりは、この社会におけるゴゼン中心の生活態度をよく示している。

以下に掲げる、主として大聖寺における口上の中で、晴れの定型的な口上（年始・年末・ご遠忌）には、内容の伝達よりもむしろ儀礼的形式的色彩が強く、襲^けの場合（電話の取次ぎ、訪問者の取次ぎ、進上物）には、定型的要素がうすれ、内容の伝達が中心となっていることがわかる。話法も、前者は莊重・古風で、御所的であり、後者は、京都の民間のものいいにかなり近づいている。

なお本稿に示す口上はその具体的な例示で、人と場によって若干の差異は認められる。

1. 年始・年末の口上 (§ 63)

(1) 新年のご祝儀申入れ (§ 64)

ひと 大聖寺ゴゼン（石野慈栄^{いわの じえい}さん）、一老（堀江要邦^{ほり え ようほう}さん）・二老（滋岡清順^{しげおか せいじゆん}さん）、若い人（三好修範^{み よししゅうはん}さん）、見習

ところ 大聖寺お二の間

とき 昭和34年1月1日

大聖寺におけるお正月のご祝儀の申入れは、元日の朝のお勤めが終わり、お雑煮を祝ったあと、十時ごろに、正装して行われる。（朝はじめて会った時には、単にゴゼンに「おめでとう、ゴキゲンヨウ」というだけである。）

写真⑧のように、お二の間 (§ 36参照) の上座に、ゴゼンが坐り、相対する下座に、一老を先頭として二老・若い人・見習と順次下よりに斜に居並ぶ（前に扇を置く）。一老は、ゴゼンに仕える尼僧たちの筆頭の人であるとともに、ことあるたびに一同の総意を代表してゴゼンに申入れたり、あるいは外部の意向をゴゼンに伝える取次ぎの人である。このあいさつ申入れの際も、一老は二老以下を代表して、その役目をするわけである。

本文(1)のように、一老がゴゼンにあいさつする間、一同はだまって頭を下げ、またゴゼンの



(⑧ ゴゼンへの新年のご祝儀申入れ)

受けの言葉を謹んでうけたまわる。(宮中でも典侍^{すけ}さんが陛下にあいさつを申入れるとき、他の女官はだまって頭を下げる。§ 65 参照。)

それらのあいさつがおわって後、次に本文(2)のような、お次どうしのあいさつが始まる。ゴゼンの方を向いていた人々は、今度は一

老に向ってあいさつをする。このときは二老がそれ以下(二老・若い人・見習)を代表してあいさつをするのである。

このあいさつ・口上の仕方によっても、この社会が階層の上に成立っている事がわかる。一老以下の者は、役^{やく}尼として、門跡であるゴゼンに仕えているのであるが、その仕えている人々の間にも身分的な段階があって階層をなしている。

かつて、宮様の住持の時代には、このしきたりはさらに厳重に守られていた。大聖寺のゴゼンの話によると、新年のご祝儀申入れの時には、宮様はおしん^{おしん}殿謁見間に坐し、同じ間^まの下の方に大上臈^{おおじようろう}、一老以下はお縁座敷にひかえる。この場合、今の一老の行う取次ぎの役目をするのは、大上臈であった。その当時、寺内の取締り、尼僧たちのしつけ、その他多くの権限は一老にあったらしいが、宮様への取次ぎ、また宮様の意向を伝える役目は大上臈がした。

一老のあいさつを受ける、ゴゼンの受けのことばは、一老のあいさつに比較すると、センテンスが短かく、しかも省略形が多い。下の者はよどみなく、詳細・丁寧^{ていねい}に^ると述べる。それに対して、それを受ける上の方は、おうように簡単に受けるべきなのであろう。

本文(2)のお次どうし(一老・二老・若い人)のあいさつは、お互に同じような内容の口上を交わす。自分たちの事をいう前に、必ずまずゴゼンの事をいう。これは宮中あてのお文^{ふみ}をみると、宛名は典侍^{すけ}某とあるが、まず陛下のご機嫌伺いから始められ、宛名の典侍の事に関しては、かえす書の部分になって始めて言及するのに対応している。女官が典侍さんに対するあいさつ・口上もまた、このような形式で陛下のご機嫌伺いから始まる。(§ 65参照)

尼門跡のこのようなしきたりは、宮中におけるオカミ中心の生活習慣の伝承であろう。昔なら、まず宮様のご機嫌伺いから述べたのを、現在では、同じようにお仕えするゴゼンのご機嫌伺いを述べ、最後にお互の事に及ぶ。これは口上・あいさつだけに限る事ではない。この社会全体の生活態度が、オカミやゴゼン中心に動いているためである。そして口上・あいさつは、特に定型化しているから、一層この事情が顕著にうかがわれる。

なお宮様時代には、このご祝儀申入れの後に、「お口祝」をいただく事になっていた。「お口祝」は、参賀の人々に対し、宮様がお手ずから昆布とかちぐりを賜わるのである。この事は、

大聖寺の「御日記」にもしばしば記されている。

本文

(1) ゴゼンへの新年のご祝儀申入れ (§ 64-1)

一老……新年のご祝儀申入れます。ご機嫌よう、ご超歳遊ばしまして、おめでとう、お悦び申入れます。旧年中は一方なりませぬご懇命(「お蔭さん」とも)をこうむりましてありがとう。

なおまた本年も相変りませず、よろしう、願います。

ゴゼン……おめでとう。みんなも揃うて気丈(きじょう)に(「達者で」「元気で」)新年のご用ども、ご苦労さん。旧年中はいろいろお世話になりまして、なおまた相変らずよろしゅう。ご丁寧(いつとう)に、一統からご祝儀、また幾久しゅう、この上ながら、よろしゅう。おめでとう、ご用を勤めるように。

〔付1〕 アクセン_ト付 ゴゼンへの新年のご祝儀申入れ (§ 64-2)

一老……シンネンノ ゴシユウギ モオシイレマス || ゴキゲンヨオ | ゴチヨオサイ(オ) アソバシマシテ | オメデトオ | オヨロコビ モオシイレマス | キュウネンチュウワ ヒトカタナリマセス (ゴコンメエオ) コオムリマシテ || ナオ マタ ホンネンモ アイカワリマセズ | ヨロシユウ ネガイマス ||

ゴゼン……オメデトオ || ミンナモ ソロオテ キジョオニ シンネンノ ゴヨオドモ | ゴクロオサン || キュウネンチュウワ オセワニ ナリマシテ | ナオ マタ アイカワラズ ヨロシユウ || ゴテエネエニ | イットオカラ ゴシユウギ | マタ イクヒサシユウ | コノウエナガラ ヨロシユウ || オメデトオ | ゴヨオオ ツトメルヨオニ ||

(2) お次どうしの年始の口上 (§ 64-3)

二老……要邦さん、新年おめでとう。ゴゼンにもご機嫌ようご超歳遊ばしまして、おめでとう存じ上げます。お互に一同、気丈で相変らず新年のご用ども勤めさせていただきまして、ありがたい事(こと)でござります。なおまた本年も相変らず、勤めさせていただきますことを、よろしゅう、お願い申します。

一老……新年おめでとう。ゴゼンにも、ご機嫌よう、ご超歳遊ばしまして、おめでとう。お互に相変らず、ご用ども勤めさせていただきまして、まことにありがたい事です。なおまた本年もご苦労さん。わたしもお世話さんになります。

〔注8〕 (§ 64-4)

- ① 申入れます……「申上げます」に相応する同輩以上に使う御所ことば。
- ② ご超歳……新年を迎えること、越年。
- ③ ご懇命をこうむり……「お蔭さんをこうむり」というより古格で丁寧な表現。
- ④ ありがとう……後に出る「ご機嫌よう」 (§ 65-3参照) とともに、尼門跡では、晴の場合、麁の場合を通して、しばしば用いられる。さらに「ありがとう」には、町方のように、「ございます」をつけない、いい切りの形を用いる。「ありがとうございます」は、むしろ田舎くさい野暮な表現とされている。「ありがとう」は、お辞儀を伴って用いるのが普通である。
- ⑤ …でござります……大聖寺・宝鏡寺・曇華院などでは、改っていうときには「でござります」「下さります」「おっしゃります」と古形を使って、「ございます」「下さいます」「おっしゃいます」

とはいわないしきたりになっている。

〔付2〕 宮中女官の新年のご祝儀申入れ (§ 65)

ひ と 元権典侍 ^{やまぐちおきこ} 山口正子さん
元内侍 ^{はづみひでこ} 穂積英子さん

ところ 東京都練馬区 穂積さん宅

と き 昭和 34 年 3 月

尼門跡と比較する意味で、宮中女官の年始の口上を示した。

最初の録音記録本文(1)は、外部から参上した元女官が、宮中にいる女官に会って、「陛下に対する新年のご祝儀を申入れる」という形である。この申入れは、受けた女官が両陛下に取次ぐ。

本文(2)は、宮中における女官どうしの口上で、最初のもの〔本文(1)〕よりは簡単になる。

この口上は、明治・大正・昭和の三代にわたって出仕の旧女官・内侍^{ないし}の穂積英子^{ひで}さん（穂積俊香^{としか}男爵の3女、明治27年京都生、明治45年出仕、昭和3年退官、源氏名は「呉竹」）と、同じく旧女官・権典侍^{すけ}の山口正子^{おき}さん（西五辻男爵の女、明治16年東京新宿御苑内で出生、明治35年出仕、源氏名は「藤袴」^{ふじはかま}。なお宮中では、正子をオサコと呼んで、同名の女官と区別した。）のお二人によるものである。穂積さんには申入れの役、山口さんには受けの役を依頼した。

陛下への年始の申入れ〔本文(1)〕は、特に低く・こもったような声で発音されている。陛下へのごあいさつ申入れという、恐れ多さが自然に発声にまで現われるのであろうか。最初はまず、両陛下のご機嫌伺いから始まる。次に東宮殿下、最後に相手の女官というように順次階層的にあいさつを続ける。

なお大正時代に行われた宮中における「新年の御祝儀申入れ」（夜のゴゼンのときにする）には、両陛下が椅子にお掛けになり、大礼服を着た典侍^{すけ}さんを先頭にして、横一列に並び、典侍さんが一同を代表してあいさつをする。（これを「お頭^{かしら}さんのごあいさつ」という。）ごあいさつの後、一人一人に天盃をいただく。

本文(2)のような女官どうしの口上の場合には、申入れのことばに対して、受ける側も、同じような口上を繰り返えすことが多い。その典型的な例として、§ 65-3を示した。

本 文

(1) 陛下に対する新年のご祝儀申入れ (§ 65-1)

穂積女官……ご機嫌^⑧よう。

山口女官……ご機嫌よう。

穂積女官……新年おめでとうございます。

① お揃い遊ばされまして、ご機嫌^⑧ようナラシャイまする事をおめでとう、かたじけのう、お悦び申入れまする。〔「ます」とも〕

なお昨年中はだんだんと結構に遊ばされまして、恐れ入ります。^⑨ 本年も相変らず、おにぎにぎとはれのゴゼンを済ませられまして、^⑩ 幾久しく^⑪ 万々^{まん}年までも、ご寿命ご長久で天下泰平であらせられますように。^⑫ (幾久しくお悦び申入れまする。)

山口女官……はい。〔低声に〕

〔問〕

穂稜女官……いよいよ、東宮さんにもご機嫌よくならせられまして、相変りませず、新年のご祝儀をおするするとすませられまして。

山口女官……いよいよおめでとう存じ上げます。〔問〕

穂稜女官……^{ふじばかまのすけ}藤袴典侍さんにも、ご機嫌よくお勤め遊ばしまして。

山口女官……ありがとう。

穂稜女官……よいお年をお迎え遊ばしまして、幾久しく万々年までも、おめでとう。

山口女官……ありがとう。

(2)－1 女官どうしの年始の口上(その1) (§ 65－2)

穂稜女官……ご機嫌よう。

山口女官……ご機嫌よう。

穂稜女官……新年はおめでとう。

お揃い遊ばされまして、ご機嫌ようナラシャイまして、昨年中は、だんだんと結構に遊ばされていただきまして、本年も相変りませず、新年のお悦びを申入れます。⁹⁹どなたさんにも、どうぞ、相変りませず、よろしゅう。

(2)－2 女官どうしの年始の口上(その2) (§ 65－3)

穂稜女官……新年おめでとう。いよいよお揃い遊ばされ、ご機嫌よくならせられ、相変らずおにぎにぎしく、新年のお祝儀も済ませられ、おめでとうお悦び申入れます。

山口女官……〔上記申入れ者と同じことをいう。〕

穂稜女官……^{ふじばかまのすけ}藤袴典侍さんにもご気丈さんにお年をお迎え遊ばしまして、おめでとうお悦び申入れます。なお本年も相変わりますよろしゅう。

山口女官……吳竹内侍さんにもご気丈さんに……〔以下上記申入れ者と同じことをいう。〕

〔注9〕 (§ 65－4)

⑥ ご機嫌よう……オカミに対して、女官があいさつする時、「ご機嫌よう」といい、女官どうしもまた「ご機嫌よう」といい合う。尼門跡においても、お次からゴゼンに対し、あるいはゴゼンどうし「ご機嫌よう」という。これは御所ことばとして愛用されている。

⑦ お揃い遊ばされまして……両陛下のお揃いを祝うことば。お文にも「愈々御揃被遊御機嫌よくならせられ候」(尼門跡から宮中奥向きへの新年のお文)とある。

両陛下には「遊ばされまして」を使う。なお女官どうしの場合や、一老がゴゼンに対しては「遊ばしまして」という。

⑧ ナラシャイまする事……「ナラシャル」は宮様以上に使う「居る」の敬称。〔「国語学」33輯、拙稿 § 6, 本文 § 77 参照〕

⑨ 恐れ入ります……晴れの口上にはよく現われるが、日常会話でも、この社会では、特にしばしば用いられる。また「ゴゼン恐れ入りますが」と、一老はゴゼンに用件を申上げる時に、付け加え、ゴゼンのことばを受ける時にもまたお辞儀をして「恐れ入ります」という。

⑩ はれのゴゼン……両陛下の召上がるお正月の朝食。三大節のは「お祝ゴゼン」という。ゴゼンはご

飯の最高敬語。(§ 83参照)

- ⑪ 幾久しく万々年までも……聖寿の万歳を祝うことば。お文にも「なほなほ御機嫌共よく幾久しく万々年までも御寿命……」とある。
- ⑫ (幾久しくお悦び申入れます。)……カッコの中のことは謹み畏まった時に使う「呑みことば」で、声を呑みこんで、口の中でいうので、相手には聞き取りにくい。
- ⑬ 間……陛下・東宮・女官という風に、身分が移行する際には、階層的ポーズともいうべき間が、少しおかれるようである。
- ⑭ どなたさん……ここでは穂稜女官の同僚の女官をさす。

(2) 歳末のご祝儀申入れ (§ 66)

ひ と 大聖寺ゴゼン、一老・二老・若い人、見習
ところ 大聖寺お二の間
と き 昭和 33 年 12 月 31 日

大晦日の夜、元日の準備がとどこおりなく終わったあと、夜 9 時ごろ、ゴゼンに対して、一同正座して、本文(1)のような一年中のお礼の口上を申入れる。次に、お次どうしは本文(2)のような口上をする。その時の作法は「新年のご祝儀申入れ」 (§ 64) の時と同様である。

本 文

(1) ゴゼンへの歳末のご祝儀申入れ (§ 66-1)

一老……歳末のご祝儀申入れます。 ご機嫌よう。今年もいろいろ、ご懇命をこうむりまして、ありがとう。 どうぞまた、相変りませず、よろしゅう、願います。

ご機嫌よう、ご超歳遊ばしますように。

ゴゼン……今年中も、要邦はじめ、いろいろご苦労さんでした。わたしもいろいろお世話になりました。どうぞ相変らず、よろしゅう。 どうぞ、みんなも気丈で歳をとるように。

本文(2) お次どうしの歳末の口上 (§ 66-2)

二老……本年も、⁽¹⁵⁾要邦さんにも、いろいろお世話になりました。どうぞまた相変りませず、よろしゅう願います。

一老……⁽¹⁶⁾あんたにも、いろいろお世話になりました。

[注10] (§ 66-3)

⑮ 要邦さん……大聖寺一老の僧名。僧名をいう方が「あなた」というより丁寧である。この場合僧名をいわず、「あなた」ということもある。

⑯ あんた……「あんた」は同輩以下に使う。「あなた」は目上、またはあらたまったときの同輩にも使う。

2. ご 遠 忌 の 口 上 (§ 67)

ひ と 大聖寺ゴゼン・大聖寺一老、宝鏡寺ゴゼン(花山院慈薫さん)・宝鏡寺一老
(喜多宗 岳さん, § 4, 5-2 参照)

ところ 大聖寺お十畳

と き 昭和 34 年 5 月

次の録音記録は、昭和32年5月5日に行われた大聖寺の開山（玉巖和尚）の550年ご遠忌の折、大聖寺に参られた宝鏡寺のゴゼンのあいさつ、それを受けた大聖寺のゴゼンのあいさつ、ならびに随伴の宝鏡寺の一老と大聖寺の一老とのあいさつとを演出してもらったものである。

まず最初は、気候のあいさつから始まり、次にご開山の事に及んでいる。

本文(2)のお次同志のあいさつでは、時候のあいさつをいい、次にお互のゴゼンの事にふれ、そして本題の開山の事を語るのである。

本文

(1) ゴゼンどうしのご遠忌の口上 (§ 67-1)

宝鏡寺ゴゼン……ご機嫌よう。

めっきり時候らしくなりました。⁽¹⁷⁾おさわりさんもアラジャリ⁽¹⁸⁾ませんお事、おめでとうお悦び申入れます。

本日はまた、開山さんのご遠忌につきまして、わたくしまで、お招き遊ばして頂きまして、ありがとうございます。⁽¹⁹⁾前々から、何かと、お大抵さんのお事ではアラジャリませんなんだヤロな。大聖寺ゴゼン……今日はようこそ。

このほどご遠忌につきまして、お尋ね遊ばしていただきまして、何よりのお重のうちいた⁽¹⁹⁾だきましてありがとうございます。早速、おはつお、お供え申入れます、一同いただきました。ありがとうございます。大はれをいたしました。

宝鏡寺ゴゼン……⁽²⁰⁾おいぼい⁽²¹⁾ぼしい事で、お加減もさだめし不加減な事でござりましたでしょう。大聖寺ゴゼン……今日はようこそ。

またどうぞ、いろいろご苦労さんになります。

(2) 一老どうしのご遠忌の口上 (§ 67-2)

宝鏡寺一老……ご機嫌よう。

めっきりと、よい時候になりました。ゴゼンにもご機嫌よう。あなたにも、お障りさんものう。

今日、開山さんのご遠忌をお勤め遊ばしまして、こなたまでお招きをお頂き遊ばしまして、わたくしもお伴させて頂きましてありがとうございます。またお間に合います事がござりましたら、何なりとお手伝させていただきとう存じます。

大聖寺一老……宝鏡寺さんにも、ご機嫌よう。

あなたにもお障りさんものう。今日はようこそ、お参り遊ばしまして、あなたにもご苦労さん。どうぞまた、いろいろ願いとうござります。

[注10] (§ 67-3)

(17) おさわりさん……「お……さん」と「お」と「さん」をつけていういい方は多い。女らしいいい方であり、御所ことばの特徴の一つである。その他にも「おすきさん」、「おたいていさん」、「おいとばさん」などがある。

(18) アラジャリ……「ある」の中間敬語にも最高敬語にもよく使われる「ございます」の意の御所ことば。（「国語学」33輯，拙稿 § 6—1参照）

- ①⑨ お重のうち……お重箱に入れたものという意。
 ②⑩ 大はれ……宝鏡寺から頂いたお重の内が大変喜ばれたので、そのお重の内は大晴れをしたという意。
 ②⑪ おいばいばしい……お粗末な・貧弱な・軽少な意。一種の卑下したことば。この社会に多い疊語。

3. お 悔 み の 口 上 (§ 68)

ひ と 大聖寺門跡, 大聖寺一老, 宝鏡寺一老
 ところ 宝鏡寺のお間
 と き 昭和 34 年 5 月

次の録音記録の本文(1)は、宝鏡寺のゴゼンの死去の際(昭和23年3月27日)の、大聖寺ゴゼンのお悔みのあいさつと、それを受けた宝鏡寺の一老(喜多宗^{しゅう}岳^{がく}さん)のあいさつ、本文(2)はゴゼンのお伴をした大聖寺一老とそれをうけた宝鏡寺の一老のあいさつをそれぞれ演出してもらったものである。

宝鏡寺では、ゴゼンがなくなったので、お悔みのあいさつは、すべて一老が受ける。一老という^{ぶん}分を忘れず、しかも自分より身分の上のゴゼンのあいさつを受けるので、むずかしいわけである。

一般に口上の文句は、最初の部分はかなり明瞭に発音されているが、後に行くに従い、ほとんど聞きとりにくいほど、小声でしかもささやくような声で発音されることが多い。§ 64 の年始・年末のあいさつの時も、§ 67 のご遠忌の場合もそうであったが、このお悔みの場合は、事柄がお悔みであるだけ、一層そうである。それは一つには、これらはすべて定型化された紋切り型のあいさつのために、お互にその内容については熟知しており、口上はいわば一種の儀式的なものであるからでもあろう。

本文(2)の一老どうしのあいさつは、いつもの事ながら、ゴゼンの事から始まり、最後に相手の事に及ぶのである。

本 文

(1) 大聖寺ゴゼンの宝鏡寺へのお悔みの口上 (§ 68-1)

大聖寺ゴゼン……さきほどは、早速お知らせいただきまして。 まことに、この度は思召しやらぬ事でござりまして、わたくしも子どもから、長いおなじみのことで、まことに、一層^そお残り多うござります。 あなた方にも長々お世話申しヤシ^④たのに、お残り多う存じあげヤスヤロ。 センド^⑤お世話さんになりまして。

宝鏡寺一老……こなたこそ、 SEND^⑥お世話さんにおなり遊ばしまして。 もうしばらくおつづき遊ば^⑦すかと存じ上げておりましたのに、昨日、ご様子がお俄^{さくじつ}にお変り遊ば^⑧しましたようなお事でござりまして。

早速にお出遊ばして頂きまして、恐れ入ります。 またどうぞ、この上ながらよろしゅう、何かとお世話さんになります。

(2) 一老どうしのお悔みの口上 (§ 68-2)

大聖寺一老……まことに、ゴゼンにも思し召しよりませず、お早いお事でアラジャリまして、恐れ入ります。こなたにもおびっくり遊ばしまして、早速お悔みにお参り遊ばしましたようなお事でござります。あなたがたも、何かとご所労中をおたいていの事ではござりません。さぞさぞお残り多う存じ上げヤス事でござりますヤロなあ。どうぞまた、何なりと手に合いますご用がござりましたら、お手伝ささせていただきますとうござります。

宝鏡寺一老……まことに、こんなお事になりまして、お残り多い事でござります。このほどまた、わざわざお出遊^{②⑤}ばして進ぜられまして、お悦びさんでアラジャリしましたのに、お俄にご様子がお変り遊ばしまして。早速お出で遊ばしまして進ぜられまして、恐れ入ります。何かとまた、この上ながら、お指図のほどをお願い申し上げます。あなたにも何かとお世話になります。

〔注11〕 (§ 68—3)

②② お世話申しヤンた……「ヤシ」は京ことばで、尊称の「ヤス」の連用形。大聖寺のゴゼンは京都方言の「ヤス」「ヤ」などを使用される。なお「ドス」は使われないで、「です」が使われている。

②③ センド……十分に、随分に、度々の意の京都方言。

②④ おつづき遊ばす……生きながらえ遊ばすの意。

②⑤ お出遊ばして進ぜられまして……「お出遊ばしていただきまして」の意。死去されたゴゼンに対することばであるので、「進ぜられまして」を付けて丁寧にいう。「いただきまして」は付けない。

4. 電話の取次ぎの口上 (§ 69)

ひ と 大聖寺ゴゼン、一老

ところ 大聖寺

と き 昭和 33 年 11 月

外部から、大聖寺に掛かった電話は、まず見習が出て聞き、その後、一老に取次がれ、一老が出て聞く。そして、一老がゴゼンに取次ぐのが普通である。

かつての宮門跡時代には、ご用は普通、お文^{ふみ}を文箱^{ふばこ}に入れて持参した。

電話が敷かれ、さらに終戦後は、何事も簡略になっている大聖寺ではあるが、やはりゴゼンが取次ぎなしで、じかに電話口に出られることはよほどの事でない限り少ない。普通、一老がゴゼンの耳に入れ、一老を通じて、その返事は取次がれるのである。

次の録音記録は、筆者井之口が大聖寺に掛けた電話を、一老がゴゼンに取次いだ模様を記したものである。

この電話に登場する山口富子^{とみ}さんは、御所に出仕している女官であり、筆者が上京の際、面会方を大聖寺ゴゼンから依頼してもらった。電話の内容は、その事に関するものである。

一老は、電話によって、筆者の言った用件をゴゼンに取次ぐわけであるが、その際、筆者の言ったことばが、尼門跡風の表現になって、取次がれている。

外部からの伝達は、一老によってゴゼンに伝えられ、ゴゼンのことばもまた、一老によって外部に伝えられる。尼門跡仲間で、「あそこの一老さんは……」といううわさ話が出る時、何

よりも注目されるのは、口上のうまさという事である。

一老の取次ぎのことばの間に、ゴゼンのうなづかれる「はい」という返事がある。この応答の「はい」は高めに発音されるようである。

本 文 (§ 69-1)

一老……ゴゼン、お居間^{いま}でアラシヤりますか。

ゴゼン……はい。

一老……お許し遊ばして。

ただ今、西京大学の井之口先生から、お電話でござりまして、せんだって、お話のござりました、東京へご出立は十三日ヤそうでござります。

ゴゼン……はい。

一老……山口富子さんへ早速、ご面会のお手数願いましてござりますが。

ゴゼン……はい。

一老……あちらさんから、何かご都合でお目にかかれませんか、ご丁寧さんな^{おみ}お文をいただきましたので。

ゴゼン……はい。

一老……いろいろと、お手数恐れ入りますが、帰りましたら、あちらのお話を申し上げますという事でござりますけれども。

ゴゼン……はい。

一老……そういう次第でござりますので、いろいろお手数を掛けましたお礼かたがた、立ちますご報告を申し上げておきます。ゴゼンへよろしゅう、どうぞ、申上げていただくようにとのお事でござりました。

ゴゼン……電話はそのまま？

一老……はい、何でござります。その由、たしかに申入れますと、申しておきました。

ゴゼン……ご丁寧さんに。

〔注12〕 (§ 69-2)

②⑥ でアラシヤル……「でございます」の意の御所ことばで、尼門跡や女官がしばしば使ふ。一老がゴゼンに対して使っている。ゴゼン同志にも使う丁寧語。〔「国語学」33輯，拙稿 § 8 参照〕

5. 訪問者の取次ぎの口上 (§ 70)

ひ と 大聖寺ゴゼン，一老

ところ 大聖寺

と き 昭和 33 年 10 月

かつて大聖寺へ、お華活けに参っていた小池^{きんこ}琴子さんが、久方ぶりで、大聖寺を訪れた時の取次ぎの録音記録である。（小池さんは一老と同等以下の身分の人と考えてよい。） (§ 84 参照)

本 文 (§ 78-1)

一老……お許し遊ばしまして。

ごめんどうさんでござりますが、ただ今、江州ごうしゅうの小池琴子さんが伺われまして。

ゴゼン……はい。

一老……久しゅうごぶさた申入れておりましたので、ちょっとこちらへ参りましたので、ご機嫌伺いに参りました。ご面倒さんでアラシャリますが、ちょっとお会い遊ばして頂きとうござります。

ゴゼン……せっかく来たのヤから。

一老……奥へ通しまししょうか、応接に致しておきまじょうか。

ゴゼン……応接の方へ

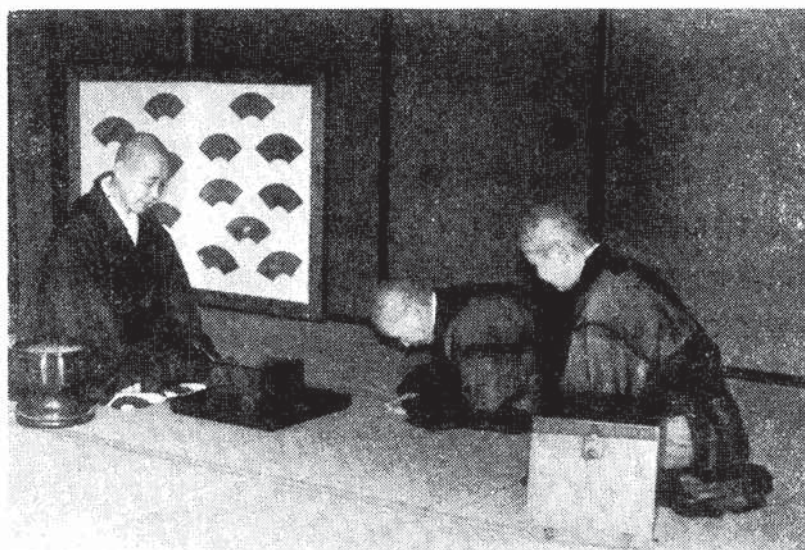
一老……はい。

6. 進上物の口上 (§ 71)

ひ と 大聖寺ゴゼン・同一老、宝鏡寺一老

ところ 大聖寺お居間

と き 昭和 34 年 1 月



(⑨ 進上物の口上)

この録音記録は、宝鏡寺門跡の一老の喜多宗岳しゅうがくさんが、同ゴゼンの誕生日の祝に、コワゴ(赤飯)を大聖寺門跡へ進上した時の口上と、これを大聖寺一老が同ゴゼンへ取次いだときのものである。

写真⑨は、大聖寺一老が同ゴゼンへ進上物のあったことを申入れているところである。この進上

物をゴゼンに取次ぐときには、写真のように、進上物(この場合はオジュウのうち)を「広ぶた」の上にのせる。なお大聖寺の二老の左わきに置いてあるのは「タジ」(持ち運びに使う、町方の「ケンドン」風のもの)であり、昔はこれに入れて使者である宝鏡寺の一老が持参したものである。

本文

(1) 一老どうしの進上物の口上 (§ 71-1)

宝鏡寺一老……日々、厳しい寒さでござりますが、お障りさんもアラシャリませんお事とお悦び遊ばします。その後はごぶさた遊ばしまして。こんにちはゴゼンのご誕生日でござりますので、みうちでふかした、オイボイボシイ（少しの意、注21参照）こととござりますが、ちょっと進ぜら

れます。よろしゅう、ご披露を。

大聖寺一老……さよでござりますか。早速ご披露申入れます。

(2) ゴゼンへの進上物の取次ぎの口上 (§ 71-2)

大聖寺一老……ただ今、宝鏡寺さんから、お使いでござりまして。

こんにちは、ゴゼンのご誕生日でアラシャりますので、まことに不加減でござりますけど、コワゴをみうちで致しましたので、お少しながら、ちょっと、ご覧にお入れ遊ばしますよう、よろしゅう、申入れますようにとの事でござります。

大聖寺ゴゼン……お使い、どなたです？

大聖寺一老……^{しゅうかく}宗岳さんでござります。

大聖寺ゴゼン……こちらへお通しして。

大聖寺一老……そう申しましたのでござりますが、「急ぎますので、こんにちは失礼させていただきます。ご都合さんで、お器を^{うつわ}いただいて帰りたい。」との事でござります。

大聖寺ゴゼン……そんなら、返上して置き。

〔付3〕 宮中女官の献上物の口上 (§ 72)

ひ と 権典侍 山口正子さん

内 侍 穂稜英子さん

ところ 東京都練馬区の穂稜さん宅

と き 昭和34年3月

陛下に京都の銘菓を献上するときの口上である。既述 (§ 65) の旧女官山口さんには、献上者としての口上を、同女官の穂稜さんには受けの役をしてもらった。

これは山口さんが大正末年に宮中へ参上して、陛下に対する献上物の取次ぎを穂稜女官に依頼しているところの演出の録音を文字化したものである。

なお陛下への献上物はオヒロモン（献上台）にのせてたてまつる。

本 文 (§ 72-1)

山口女官……ご機嫌よう。 だんだんとよい時候になりまして。

穂稜女官……ご機嫌よう。 だんだんとよい時候になりまして。

山口女官……恐れながら、お揃い遊ばされまして、ご機嫌ようナラシャイますことを、おめでとう、かたじけのう、お喜び申入れます。

このたび、京都の方から上京を致しまして、つきましては、このお菓子、お珍らしゅうもござりませんけれども、^{かわみちや}河道屋の「^{そば}蕎麦ぼうる」おすきさんと存じましたので、ほんとに少々ながら、献上させていただきたいと存じます。どうぞよろしゅう、お取りつくろいにて、お申入れいただきます。

穂稜女官 ようこそ、ご満足さんのものを、ご献上遊ばしまして、早速にご披露申入れます。どんなにか、ご満足さんでアラシャイましょ う。

山口女官 どうぞ、よろしゅうお願い致しまする。

[注13] (§ 72-2)

- ② 河道屋……京都の銘菓のしにせ^(京都市下京区姉小)_(路御幸町西人ル)、「そばぼうる」で有名。なお御所ことばではこうした商人を「ヤ」(屋)と言っている。(§ 35参照)

Ⅱ 御所ことばの生活を語る (§ 73)

前章に掲げた尼門跡のあいさつ・口上の諸形式からも、この社会における作法と密接な関連をもつ言語活動の場面を予想することができるが、次に示す尼門跡の座談会の録音を文字化したもの (§ 74・75)によって、一層よく、御所中心の階級的・閉鎖的集団における個人の話しことばの位相を明らかにみることができる。

以下の二つの座談会の中、前半の「新年三日の御事」 (§ 74)からは、特に尼門跡内における御所ことばの自然の使用と、御所ことば語彙の文脈中における用法を引出し得るし、後半の「御所ことばの生活を語る座談会」 (§ 75)からは、尼門跡の交際圏(クルワ)で使用されている御所ことばの様態と、御所風の生活形態の若干をとらえることができる。

この録音を文字化したものによって、そこに登場する各個人の話しことばのスタイルがどのような特色をもっているかを推察することさえ可能で、資料的に、その点を努めて考慮したつもりである。

1. 新年三日の御事 (§ 74)

略号

ひ と 大聖寺ゴゼン^{いわの}(石野慈栄さん)……大聖
宝鏡寺ゴゼン^{かさんのいん}(花山院慈薫さん)…宝鏡
大聖寺一老(堀江要邦さん)……一老
ところ 大聖寺門跡おしん殿
と き 昭和33年1月3日

この録音記録は、新年三日に大聖寺門跡を訪問された宝鏡寺のゴゼン(大聖寺ゴゼンのご付弟であった)と、大聖寺のゴゼン、その門跡に仕える一老を交えて、正月の行事と昨春行われた大聖寺開山の550年遠忌などについて対談をしてもらったものである。(§ 5-1・2, § 34参照)

本 文 (§ 74-1)

一老 おめでと、ご機嫌よう。 ようこそ。どうぞ、お通り遊ばして。

一老 宝鏡寺さんがゴアシャリましてござります。

大聖 どうぞ、奥の方へお通し申してな。

一老 どうぞ、おとおり遊ばせ。

宝鏡 新年おめでと、ご機嫌よう。 昨年中はいろいろとお世話さんになりまして……

大聖 おめでと。 あなたにもゴ気丈さんで^{ちようさい}ご超歳になりまして、おめでと。またこんにはおはやばやとお礼にお出遊ばしていただきまして、ありがとう。 おかげさんで、お互さんに^{しゆしやう}修正もお滞りのう満散になりまして、ありがたい事です。

そなたさんも、ご同様と存じます。おめでとう。

②

宝鏡 おめでとう、おとどりのう。

大聖 何かとお忙しかったことでござりましょ。きょうが済みませんと、お互さんにお正月らしい気分になれませんな。そなたさんも、やっぱし、おぞうには白ムシ〔白味噌〕で、お供えになりますか。

宝鏡 はい。カラモン〔大根〕とヤヤイモ〔小芋〕を浮かせまして、オカチン〔お餅〕にお祝いのヤキカベ〔焼豆腐〕とむすび昆布^{こんぶ}をお供え申し上げまして、わたくしはじめ三が日それを頂きます。

大聖 どちらさんもお同様でござります。

一老 ゴゼンがたも、お早くから、オヒナッて^③いただかなくてはなりませんし……

大聖 昨年はな、ご遠忌を勤めねばなりませんので、元日から何やら張りつめた心持でござりましたが、おかげさんで、今年は、まことにゆるやかなありがたいお正月を迎えました。

宝鏡 ほんまに昨年はご遠忌もご立派にお滞りのう、お勤め遊ばしまして、結構でござりましたな……

大聖 全く開山サンのお徳なり、なお宮さん方^{がた}、おはじめ、皆々さんのおかげさんでござります。信徒総代方も多用の中から、度々と打より、色々と尽して下されました。定めし、ご開山さんもお満足さんのお事でアラシャリましょと有難がっております。

一老 ほんまに、昨年は元日からご遠忌のお事で、わたくしどもも元日からただただそのお事で一杯でござりましたのに、夢のようにお滞りのうオスルスル^④済ンマシャリまして、こんな有難い事はアラシャリません。

当日は、ご参拝のお方さんのお晴れやかな顔を存じ出しましても、うれしゅうござります。ゴゼンにも、ご安心遊ばしましたか、このお正月は、ひとしおご機嫌ようお若返り遊ばしましたように、見上げます。有難いことでござります。

どうぞ、宝鏡寺さん、きょうは、おゆるゆる遊ばしまして、なんにもアラシャリませんが、おひるのオバンをごいっしょに上ラシャッていただきまして。

宝鏡 はい、ありがとう。

一老 お茶でもおたのしみ遊ばしまして、おかるたやらお双六でも、おにぎにぎしゅう遊ばしましては、どうでアラシャります。お次^{つぎ}のものも皆お相手させて戴きまして、失礼申し上げさせていただきます。〔以下略〕

〔注14〕 (§ 74—2)

② お通り遊ばして……接続助詞「て」はしばしば使用される。

この例は、後を省略して余韻を残す表現である。

これとは別に、「はい、……浮かせまして、……お供え申し上げまして、……」と「て」を使って、事柄を次から次へと並べていく、長々しい表現がしばしば用いられる。

これらは御所ことばの文体的特色の一つである。

③ ゴア歇尔……一老が宝鏡寺のゴゼンの「おいでになる」ことをいう尊称。宮さん以上に対しては

「成ラシヤル」を使う。（「国語学」33輯，拙稿 § 6，本文77参照）

- ③⑩ お通し申してな……終助詞「な」は特に大聖寺ゴゼンのことばに多い。「ね」を使わないで「な」を専用されている。
- ③⑪ 修正も満散になる……正月元日から三日まで，玉体安穩，国家の隆昌を祈ってする修正会も円満に終わるの意。
- ③⑫ そなたさん……「こなたさん」に対する語で，相手の門跡をさす尊称。その他，尼門跡には「こなたがた」といういい方があるが，この場合，「こなたがた」は，この社会全体をさす。（尼門跡のみをさす事もあり，公家社会全体をさす事もある。）
- ③⑬ オヒナル……ここではゴゼンのお起きになる意（御昼成る）。
- ③⑭ 済ンマシヤル……お済み遊ばされる意。一老がゴゼンに，開山さのご遠忌のことをいうときの最高敬語。「マシヤル」は，動詞のうちの限られた語の連用形につく助動詞（「国語学」33輯，拙稿 § 7参照）

2. 御所ことばの生活を語る座談会（§ 75）

この録音記録は，旧堂上会京都支部の主催で，御所ことばを現に使用している京都在住の，尼門跡のうちから，お直宮寺である大聖寺門跡・宝鏡寺門跡（§ 5 参照）・曇華院門跡（§ 4 参照）および旧公家出身の冷泉恭子さん・山本種子さんに，霞会館にお集り願って，座談的に御所ことばの生活についてお話を伺ったときのものである。

司会をした筆者の依頼で，主として大聖寺門跡には御所ことばの概観を，宝鏡寺門跡には御所人形について，曇華院門跡と随伴の一老には朝のあいさつや来客のあったときのあいさつを，またその他の旧公家出身の冷泉さんと山本さんにはその公家ことばを，さらに元侍従・公爵徳大寺実厚氏には今上陛下の侍従をしておられた当時のことについて，それぞれお話しをいただいた。

この記録の内容の一端については，特に説明を加えるまでもないほど，それぞれの場合についての具体的な発言がみられる（若干の「補注」を〔 〕を付けて加えた）。また語彙や語法についての話題のほかに，録音には言語生活の諸相が浮び出ているので，言語と生活の結びつきを考える資料としても注目したい。

ご出席の方々，特に尼門跡が御所ことばを日常生活で，極めて自然に使用されている様子は，対話の現実的諸例に徴しても明白な事実である。尼門跡使用の御所ことばと公家使用の公家ことば，さらには宮中女官使用の御所ことばとの関係の一部をもこの録音から，うかがうことができよう。

こうした御所ことばの生活を語る会にご参集いただいた大聖寺門跡・宝鏡寺門跡・曇華院門跡，冷泉さん・山本さん，さらにこの会をご計画くださった旧堂上会京都支部長徳大寺実厚氏・同主事藤森信次郎氏に，心から感謝するものである。

出席者	大聖寺門跡	石野慈栄さん（明治20年 京都生）……大 聖
	宝鏡寺門跡	花山院慈煎さん（明治43年 東京生）……宝 鏡
	曇華院門跡	飛鳥井慈孝さん（明治31年 京都生）……曇 華

人 文 学 報

水無瀬忠政元子爵妹 冷泉恭子さん（明治21年）……冷泉
 （水無瀬神社社家出身）
 萩原員種元子爵の二女 山本種子さん（明治29年）……山本
 旧堂上会京都支部長 徳大寺実厚氏（明治20年）……徳大寺
 元公爵・元侍従
 曇華院一老 吉村宗明さん（明治28年）……一老
 霞会館主事 藤森信次郎氏（明治31年）……藤森
 司 会 者 井之口有一……………井口

ところ 霞会館

と き 昭和32年11月8日

本 文

〔(1) 大聖寺門跡の由緒と御所ことばの概観 § 76〕

井口 それでは、みなさま方から尼門跡さんでお使いになっていることばや、あるいは旧公家の方がお使いになっていることば、あるいはまた宮中でお使いになっていることばなどにつきまして、いろいろ、そのご生活や風俗・習慣などに関係させながら、お話いただいたら大変ありがたいと思いますが。

最初に、大聖寺門跡の石野慈栄様から、御所ことば、あるいはその方面の全体について、気らくにお話をいただいたら、どうかと思います。

大聖 わたくしもそう古いことは存じませんしな。わたくしの師匠〔大聖寺25世の樋口慈綱門跡〕になります方は現に大聖寺にお坐りになった宮さん〔大聖寺24世の倫宮〕に仕えたお方で、よくご承知ヤッたんですけども、わたくしは一向そんなこと、はたに長いことおりませんんだのでな、十分よく心得ませんので、まあ古い人に聞きましたりな、書物ぐらいのことよりわからんのでせ。

井口 その最後の宮さん〔24世倫宮〕は光格天皇〔119代〕の皇女の方でございますね。

大聖 そなたが大聖寺としては、宮さん、最後にご住職あそばされた宮さんで、それからこちらへご維新まで、ずっとご無住になりまして、それからまあ明治以後、堂上の娘が住職拝命することになりました。それから、宮さん・お直宮さんですサカイニ、堂上の娘が二人ずつ上臈〔§ 43〕に出まして、大上臈と小上臈、まあちょっと近ごろの皇族さんで申すと、ご用掛〔§ 34〕でござりますなあ。ちゃんと得度をしましてですな、そういう人がご維新の時に残ってましたので、それが幸やというので、つまり上臈が、まあ、住職拝命することになりましたんですな。その上臈も、こう申すと、大変自慢のようですけれども、大聖寺・宝鏡寺・曇華院〔§ 3, 「どんげいん」といわない〕・光照院とこれだけが、お直宮がご相続あそばすことに御所から定められたもんで、お直宮さんに限って堂上の娘が二人ずつ上臈に勤めますことになりましたんでござりまして、ほかのお寺がたには上臈というもの、あまりお使いにならんのだらしゅうござりますな。

井口 光格天皇さんの皇女の方が入寺されました時、普通一般だとよくお興入れといって、こ

う、つり物などつって、盛大にするんですが、そういう時はどうなんでしょう。

大聖 なかなか、そのご入寺と申しますけれどもな、妙に、その、ご降誕になりますと、お寺のまあ大聖寺宮ご相続ということになるのです。ご入寺に違いござりませんけれどもな、そしてまあ、少しお年が召してお十かお十一ごろに、いよいよ、ご入室^{にやうしつ}ちゅうことになります。その時はまあ大変な、「御日記」[§ 32] 見ますと、お行列^{ぎやうれつ}で、お立派なことらしいんでっせ。お公家さんのお供もたんとござりますしな。お大層らしいんですな。

井口 それが九つの時でございましたか。

大聖 はあ、あの光格天皇さんの宮さんはお九つでご入寺なすったらしゅうござりますな。

井口 そうすると、光格天皇さんの皇女のかたは、お九つで、お九つでご入寺アラシャリましたのですね。(笑)

大聖 お九つさんで、ご入寺でアラシャッタのです。(笑)。

井口 その時、御日記なんかに出ているんですが、何か、お乳^ちの人[§ 34] とかなんか、小さい時からですね。乳母のようにお付きになった方が三人、お竹とかお梅とか何とかいう名前が出ていたのですが。

大聖 はあ、そうです。先日申しました、それ、ご家司^{かし}って言うてな、御所からご家司っていう人が付きます。その人の家内^{かない}やら、ご用掛の人の家内などが、オサナサン〔ご幼少〕、それこそオサナサンです。小さい時、おさなさんの間、お付き申し上げているのですな。やっぱり、その子供を育てた人が付きませんと、この、ずっとお寺にいる者では、子供の勝手がわかりませんので、それで、そう言う人が宮さんのまあ、オサナサンの間、お付き申し上げたらしござりますな。お書き物で見ますと。

井口 維新前^{びく}の比丘尼御所へは、皇室の御所ことばが、じかに入って、宮さんといっしょに、そのお付きのかたとか、いろんなかたといっしょに入って来ているのですね。まあ、おそらく御所ことばでご生活になっていると言うのは、宮中と尼門跡さんや一部のお公家さんと言うようなことになっているのですね。

〔(2) 「ナラシャル」「ゴアシャル」-§ 77〕

大聖 はあ、さよでござります。内親王さんがナラシャリますサカイニ、すべてそのことばは宮中のとおりのことばをな、日常に使うことになりましたな。

井口 内親王さんの時には、ナラシャリますという一番上のことばを使うわけですね。

大聖 はあ、ナラシャリまして。

井口 その下だとまあ、敬語はゴアシャリまして〔お出になりました、§ 74-2〕ということになるので。

大聖 そうです。オカミでなら、皇族さん以上でないと。まあ、昔からナラシャルということばを使いますのは、大変やかましござりました。

井口 いわゆる「お成り」というわけなんですね。われわれ階級だと、ゴザッタぐらいでいいかもわかりませんが(笑)。

大聖 で、宮さんと同じことばは、どうしでは使えんことに、まあ、なっておりましたのですけれどな。

井口 それがやはり、だんだん、そういう区別が少なくなってきて、一番最高級のナラシャルことばをだんだんまわりの人が使うことになるのですか。

大聖 そうです。宮さんがたがいらっしゃらん〔ナラシャラン〕もんですサカイニ、つい、こう、そこらで使うことになりましてな。まあ、そのお公家さん、公家って申しても、これ、やっぱり臣下でござりますサカイニな。そうそう、陛下と宮さんとおんなじことばを使うわけには参りませんわな。

井口 はあ、そうでございましょうね。皇族と臣下での使い分けが、ことばの上に、まあ、いろいろあったと思われそうですが、だんだんお話をさせていただくうちに、はっきりしてくると思います。

大聖 また、おなじ皇族さんと申し上げても、今はそんなことござりませんヤロけど、お直宮^{じきみや}さんとな、普通の皇族さんとはまた、そこに少しお違いもアラシャルらしいですな。

〔(3) 徳大寺公爵の侍従のとき - § 78〕

井口 徳大寺さんはいかがですか、侍従をなさっていた時分に。

徳大寺 わたくしも勤めていたんですが〔大正天皇の侍従として〕、あまり御所の方では、いわゆる御所ことばと言うのは、ごく使われるのも少いので、貞明^{こうぐう}后宮さまの大宮御所の方は、お仕えしているかたが、みな女官^{にょくわん}さんが旧公家から出ているかたが多うございまして、自然御所ことばが残っていますけどね。それですから、わたくしの時でも、大宮御所にお使いにいきますのは、ちょっと、そのことばができないと困るんです。大宮御所にお使いに行く人は侍従のうちでも、決っておったところというわけで。

〔(4) 宝鏡寺門跡のこと、御所人形を中心に - § 79〕

井口 大宮御所の方では、終戦前まで、そうとう広く御所ことばが使われていたらしいですが。なにか、宝鏡寺さんが得度なされた時に、大宮御所にお出になって、ごあいさつにおあがりになったということを伺っておりますが。宝鏡寺さん、なにか、その時のこととか、あるいはお人形の、ご自慢の御所人形のお話でもなさったらいかがでしょう。

宝鏡 得度の時はね、京都に、ちょうど大宮さんがナラシャりました時にお辞儀をさしていただきまして、^{かつしき}喝食^{かつしき}って申しまして、この髪を落さずに、おすべらかしで、額にいちよう〔銀杏〕の形をゆって、半俗半僧のふうでござりまして、それで、お辞儀をさしていただきました。年が参りませんので、どういふ……。

井口 おいくつの時ですか。

宝鏡 十三でござりました。どういうふうに、おことばをいただいたか、あんまりはっきり覚えておりませんが。

井口 お師匠さんの大聖寺さん、どうです？ その時は。

大聖 その時は、わたくしは、いっしょにおりませんなんでな。そののち一年ほどして、東京

に参りました時に、まだ后宮さんがアラジャッタのでしょ？

宝鏡 はあ、まだ后宮さんで。

大聖 貞明后宮さんが大正の^{わん}年に、まだ后宮さんでアラジャリましてな。いっしょに、その時にご対面アラジャリましてな。いろいろお話がアラジャリましてな。その時に「若いものはな、やかまし、やかまし言うといても、なかなかええ加減なもんや。」。わたしがな、「この人、おとなし、お寺によう仕えてくれて」と、申し上げますと、「それはまあ結構やけれどもな、もう、若い人は持ちあげたらな、どうもならんサカイニな、何べんでも、言うていい加減や。」というて、女官さんにそんな人がありましたか知れませんがな。大宮さん〔貞明皇后〕が、そな、おっしゃりましたがな。いつもご対面アラジャリますとな、こんこんとご教訓をおっしゃっていただきましてな。京都のことも、よう、ご記憶でアラジャリました。ただいま、どないしてるとかな、宝鏡寺どないしてるとかな。いちいちお尋ねアラジャリましてな。

井口 いま、お開きになっている御所人形展の方は、いかがでございますか。

宝鏡 はあ、ほうぼう、みなさんのお蔭で開きましたんでござりますけど。宝鏡寺の自慢のは「^{ばんぜいさん}万世伊様」ていうお人形さんで、宮さんのね、光格天皇さんの数代ほど前の^{ごさい}後西天皇の宮さんのご愛甌のお人形で。

大聖 ^{ほんがく}本覚院の宮さん〔宝鏡寺第22世の宮、後西天皇の皇女〕て申しあげた宮さんのご秘蔵でアラジャッタらしいですな。

宝鏡 あんまり、おそばで可愛がりになったんで、魂が入って、夜回りをあそばしたとか、いろいろ伝えられておりますが。また、オメシ〔お召物〕もいろいろ。

大聖 何もかも、お道具がたくさんお揃いでアラジャルのでっせ。お^{こまもの}小間物からな。

宝鏡 お^{じあか}地赤〔緋縮緬などに縫い取りしたもの〕に。

大聖 お召も、いろいろお揃いで、オコマ〔お小間物〕のお櫛から、なにからなにまで、よくもあれだけ、お揃いになったと存じます。このお屏風もな、ちゃんとアラジャリますのでっせ。宮さんのお筆さんでな。

宝鏡 親翰から、その当時のお公家さんのお身寄りのお方から、それがこんな豆色紙でござります。

それから、あのお台人形っていうのは、どういふなんでござります？ ご降誕の時に宮さんがお頂きに。

大聖 いまの宮さんでも、お頂きになりまっシャロ、お台人形って申して。お始めて、いまでこそ、宮中でご降誕でござりますけどな。お産でお下りでござりませんけどな。お始めての時に、お祝ごとに、お台人形と申してお頂きになりますらしいのですな。

徳大寺 お初節句でございますか。

大聖 はあ、このくらいのお台にな、鯛を釣ってる人形とか、つくね〔仏掌〕の人形やら、みなお頂き遊ばすらしござりますな。

宝鏡 宝船引いてるとか。こんど、一つね、冷泉さんから拝借しておりますけど。あれきっ

と蓮徳院さん。^{れんとくいん}〔孝明天皇の高級女官、岩倉俱実公の姉〕

冷泉 そうです。

大聖 そしてみな、お頂き遊ばしたのをば、それをお持ち遊ばして、お寺がたへご入寺でござります。それで、みな残っておりますんですな、お人形がな。たくさん、毎年お頂きのですサカイニ、ご生母さんから、ずいぶんお頂いてござるのですな。^{その}園さん〔大聖寺19世・20世の宮の生母は園家の出〕から、たくさんお頂きになってるんですよ。

また、^{どんけいん}曇華院さんのお雛さんは、とてもイトボイ〔かわいい〕お雛さんでござりますっせ。

曇華 そうでござりますな。わたくしのは^{ごさいいん}後西院さんのでっせ。

大聖 それはそれは、それこそイトボイお雛さんでござりますっせ。

井口 イトボイというのは、お可愛いというのですね。

宝鏡 オシマイ〔お化粧〕のお道具やら、いろいろ、^{たらい}お盥からな。

曇華 ちょっと、よそさんのよりは^{おとし}大分イトボござりますな。

曇華 一老 さよでござりますな。まあ、なにもかもが小さいのでね。^{みうち}御内のはちょっと。

大聖 ずいぶんたくさん、その、^{まいとし}毎年、宮さんお得度まで、お雛さんをご拝領になりましたな。

仙洞さんアラシャりますと、オジジサン〔おじ様の御所ことば〕オババサン〔おばあ様〕とから、またご両親さんからと、たくさん、そのアラシャッタらしいですけどな。もうその、こなたの光格天皇さんの宮さん、ご薨去の時に、すっかりそれぞれご遺物に出ましたそうでな。いっこう残っておりませんがな。またご遺物くださる先が多いものヤサカイニな。ご生母さんの方むきヤとかな、みなご家来むきに出ますのでな。

井口 大聖寺さんなんかに御所人形さんがたくさん……。

大聖 たくさんもござりませんけれど、まあ、^{そろ}一揃揃でござりますな。しかし、宝鏡寺さんの宮さん、お年を召してナラシャって、光格天皇さん・オモウサン「お父上様」より、おあとで、薨去ヤったもんでござりますサカイニ、ご頂戴もんがたとアラシャル。こちらのミウチの宮さんは、オモウサンよりおさきえ薨去ヤったもんですサカイニ、宮さんが、いっこう、お頂きが無かったらしいですっせ、形式だけで。

井口 そうすと、この宝鏡寺さんの方の^{ほう}光格天皇の皇女のかた、そのかたはそうとうのお年まで？

宝鏡 59までです。

〔(5) 「オモウサン」「オタタサン」-§ 80〕

井口 そうして、今、お話になったオモウサンがおなくなりになったあとで、いろんなものを。オモウサンていうのは、宮中宮家をはじめ^{せいが}摂家・清華・大臣家でお使いになることばだそうですね。

大聖 五摂家、それから^{かさんのいん}徳大寺さんとか、花山院さんはみなオモウさんでしょ。ひら公家はオデエサンと申します。「おとうさん」はいっこう使いませんな。

井口 それから、おかあさんの方はどういうふうにいうんですか。

大聖 御所の宮さんはオタタサン、オタタサンでアラシャリますやろな。

徳大寺さんあたりでは、オタアサンのことを。[§25—2 参照]

徳大寺 わたくしのところで、わたくしの場合は、申しませんけどね。わたくしの父までは、申しているようでございます。わたくしの祖父がおりますんでね。わたくしの祖父や祖母を父はオモウサン、オタアサンと申します。わたくしが、わたくしの父をオモウサンと申しますと、おとうさんと間違えられますから、わたくしの子どもの時は、父母をやっぱり、おとうさん、おかあさんといって、区別しております。

大聖 はあ、そうでございますか。やっぱし、御所はオモウサンでございますな。

徳大寺 そうでございます。

井口 オタタサンと「タ」「タ」と分けていうのと、オターサンと延していうのと、二いろあるらしんですが、なにか区別があるんですか。

大聖 冷泉^{れいぜい}さんはやっぱりオタアサン？

冷泉 はあ、そうです。

大聖 およろしいところがオモウサン・オタタサンで。

井口 「タ」「タ」と分けるわけですね。

大聖 おばあさんのことでも、オババサンと申しますな。

徳大寺 音便、簡略になっているんでしょうね、呼びやすいように。

井口 まあ、「タ」「タ」と分けるのが、元の形だったでしょうから、^{うえ}上つかたの方ではなるべく古い古式のことばをお残しになり、「タ」「タ」と二つ分けておっしゃるということになるんじゃないでしょうか。

〔(6) 曇華院^{どんけいん}門跡でのあいさつ「ゴキゲンヨウ」-§ 81〕

井口 次は、嵯峨の曇華院さんにですね。一つお願いしたいと思いますが、たいへんご迷惑ですが、ちょうど、一老さんがおいでになっていますので、ご門跡で、朝お起きになって、あいさつなさったりする、そんなところから一つ。朝のひと時のことを簡略に、おっしゃっていただけたら、たいへんありがたいと思います。朝の「ゴキゲンヨウ」[§ 65—3]は曇華院さんの方では、いつ、始まるんでございますか。

曇華 わたくしの方でござりますか。わたくしの方はね、お堂の方のお供えをあげまして、わたくしどもがちゃんと坐りましてから、始めて「ゴキゲンヨウ」と、あちらからあいさつを受けます。それまではね、用事のことだけは申して参りますけれども、それまでは、顔を見ておりまして、^{つぎ}次の人もなにも申しません。

井口 正式の「ゴキゲンヨウ」(お早う)は、ご飯の時に始まるというわけですね。そうすと、ちょっと、よそと違うようでございますね。

大聖 わたくしのところは、始めて会いました時に、「ゴキゲンヨウ」で申します。

曇華 黙ってお辞儀はいたします。黙ってお辞儀はいたしますよ。これこれでございますと、申入れててくれますんです。ほんとのあいさつは、わたくしがお堂のご用をしまいまして、

そしてちゃんと坐りましてね、それから始めて、「ゴキゲンヨウ」と、これこれでござりますとかね、あいさつを致します。

〔(7) お供えもの-§ 82〕

井口 それでは、ひとつ恐れ入りますが、(笑)、朝お起きになってからの順序は？ お勤めになるわけですね。お勤めの時に仏さんにお上げになる色んなお供えものなんかも、御所ことばが、いろいろあるようですから、ちょっとすみませんが。

曇華 お霊具〔^{りょうぐ}仏様へ供え
^るお膳部〕にね、(笑)、季節季節のお野菜、それぐらいのことでござります。

井口 いま、どんなお野菜をお上げになるわけですか。

曇華一老 時に応じましてね。

井口 11月ごろだと。

曇華一老 お祥月さん〔^{しょうつき}§ 7〕とか、なんとかでござりますとね。また、いろいろお新しい、お珍しいものを整えまして、お供えさせていただきますでござりますけど。

大聖 また宮さんはな、お好きさん〔^{うかご}ご好物〕なものを、みな伺うとりますとな、どこさんでも、お供え遊しますらしいでっせ。

曇華 さよでござります。

大聖 曇華院さんは、なかなか、すべてのお事が、ごていねいに遊ばすらしいんでっせ。まあ、このごろですと、くだものの柿ができますな。柿のはつ取りは、いちばんに宮さんにお供え申します。どこさんもそうでござりましょうな。

曇華 そうでござりますな。おはつをな、お供え申します。

大聖 それから、めいめいどもが頂きますことになっておりますので。

井口 お供えものは、やはりオムシ〔お味噌〕の何かで、おつゆのようなものも、お供えになるわけですか。

曇華 オミオツケで申しまして、味噌でこしらえたオツユでござります。それに、オバン〔ご飯〕とオミオツケ、そこへお烹しめ、何かとたき合わせまして、それにあえましたものを付け、にちにちはそんなもので、お霊具はお供えいたします。それなんかできましたら、「恐れいります、お霊供ができましたので、お供え遊ばしていただきます」と申して参りますので。まあ、それ、にちにち、オチャト〔お茶湯〕や、そういうお霊供をお供えいたしました。

〔(8) 「ゴゼン」「オバン」「ハン」-§ 83〕

それから、「オバンでアラジャリます」と申してくれますと、わたくしが参りまして、そして、坐りまして、みんな出てきてくれハッテ〔ハルは軽い敬称の助動詞〕、はじめて「ゴキゲンヨウ」と申してくれます。

それから、まあ、オバンをいただきまして、わたくしが、ほとんど済みましたら、いただきます言うて、あちらでお食事いただきます。〔§ 25—2 参照〕

井口 「オバンでアラジャリます」というのは、「お晩」でございますというのではなく、「^{はん}ご飯」

でございますというわけですね。(笑)

曇華 ご飯^{はん}って申しませんで、オバンって申しますな。

井口 仏さんにお上げになるのは。

曇華 お霊具って。

井口 オバンは、ゴゼンとは区別しているようでございますね。なにか宮中でも。

徳大寺 宮中では、ゴゼンで申しますな。

井口 オカミのをゴゼンというわけですか。

大聖 そうです。ミウチでは、神さんと仏さんにお供え致しますのは、ゴゼンで申します。自分でございますのがオバン。

井口 宮中では、自分のをハンというと、「公家ことば集存」[§ 25]にのっていますが、ハンとオバンと。

大聖 「ハンをたべまして」とか、「ハンをしまいまして」とか申しますな。

井口 尼門跡でも申しますか。

大聖 尼門跡ではあんまり申しません。

井口 そういうこと、おっしゃったこともあるんですか。

曇華 食事時に、人の参りましてな、待ってもらいます。出てまいりまして、「ハンをいただいてまして」と、よう、申します。ただ今は、そんなこというても、通じませんサカイね。

井口 自分のものには、ゴハンと「ゴ」を付けていわないで、ハンとだけいう。それから、敬うものでは、ゴハンとかゴゼンとか、「ゴ」を付けているのですね。ハンというのはおかしいと思っていましたが、ようやく、わかりました。

〔(9) 来客と訪問-§ 84〕[§ 70参照]

井口 そうこうしているうちに、来客なんかのあるような時には、やはり一老さんが。わたし〔井之口〕がお邪魔いたしたことにして。(笑)

井口 突然お邪魔しまして。

一老 このたびは、こんにちは、ご遠方の所を。

井口 ゴゼンにお目に掛りたいと思います。

一老 ゴゼンノ 井之口さんがお出でになりましてござります。

曇華 そうですか。

一老 お座敷にお通してござりますで、どうぞ。

曇華 それではさっそくお目に掛ります。

曇華 まあ、こういう調子です。(笑)

井口 「お出でになりまして」という意味の時に、「ゴアシャリまして」というふうにいっても、よろしいわけですか。わたしの時は身分が低すぎるので、「ゴアシャリまして」といってはならんのか、それとも。(笑)

大聖 わたくしなどござりますと、「大聖寺さん、お参りになりました。」とこう申してくれ

ますな。この「お参り」っていうことばが、神さんや仏さんに参る、もの詣での「参る」とは違いまして、御所へ参るのは参内と申しましょ。うちに参るっていう意味から、「お参りあそばして」て、みな申しますな。

こなたでも、昔は宮さんのご在住ですサカイニ、「お参り」、またお帰りのことは、「おいとまをあそばしまして」て、こう申しますな。

徳大寺 女官さんなら、「おさがり」と。

大聖 たいてい女官さん方は、「大聖寺さん、おいとまになります」というようにな。

井口 門跡さん方から、御所ことばでご生活になっているありさまをいろいろ伺って、なんていうんですか、大宮御所へあがった時のような気持になりました。どうもありがとうございます。

大聖 今は宮さんがナラシャリませんでな。ことばがだんだんと粗末になりましてな。そこへ近頃のことばが入りましょ。昔のことば、申しましてもわかりません。人に、「おかしいこというてるなあ。」というようなもんでしょ。やっぱし時にあわして、ちょっと妙なことばも使わんならんことになりませんしてな。

〔10〕 公家の場合—(1)冷泉家, § 85〕

井口 次は、^{れいぜいゆき}冷泉恭子さんの方から、お公家さんのお家柄ですし、また定家卿のお家柄ですから、一つ恐れ入りますが、いろいろ、お公家さんのお話なんか伺えたら、大変ありがたいと思います。

きょう始めてお宅へ伺いましたが、入口の所ですね、ああいう建て方は、やはりお公家さんの建て方でございましょうか。天井がこう高くなって、何造りと申しますか。

冷泉 やはり、なんでございましょうな。なんと申しますんのか、いろいろ何台とか、なんとかいうて造りもございしますが。わたくしはあまりはしっぱ公家で、それこそはしっぱでございすからな。ただ役に立つぐらいの公家としての建前でございすでしょうな。よそさんと違いまして、「敷台」^{しきだい}がございすな、わたくしの方には。あれはやはりお駕籠をのせたサケ〔「サカイニ」の略〕、敷台がございす。敷台のあるところが少ないそうでございすな。

井口 敷台というのは？

冷泉 玄関に^{いたにき}板敷がございすな、あれが敷台と申します。それとやはり、^{ついたて}衝立みたいなものでございしょうな。下には立て軸とか、いうのが付いております。それが公家の残りヤとかみんなおっしゃっていただくのでございすけどな。

東の方に「物見」^{ものみ}がございましたんですけれど、昔はやはり外へ見物に出るちゅうことが出来ませんので、門^{かど}のことを、みな物見から、腰^{こし}から、^{のぞ}覗いたものとみえまして、東の方にただ今、あれを改造して茶席にいたしましたんですけれど、それが物見でございましてございすけれど。あんまり古いことはございせんもんでございすから。

井口 冷泉さんの方は旧お公家さんのお妹さんで、いわゆるブラッシャルわけですね。伺うと、何か定家卿以来のいろいろ、歌のご本とか、随分、古文書をご保存になっているとかいうこ

とを伺っておりますが、やはり定家卿のご直筆なもんも、相当あるんでございますか。

冷泉 あまりたくさんございませんけど、ちょこちょこ、ございます。

井口 何か伺うと、幸い火災なんかにはあまりおかかりになってないようで。

冷泉 家はやはり火災にかかっておりますのんですけど、あちこち疎開いたしておりましたのが。疎開いたしますために、古文書がだいぶん紛失いたしましたそうでございますけど。まあ少し残っておりますので。

井口 江馬務先生がお書きになったものにですね。京都のお公家さんのうちでは、冷泉さんの方が、よく、公家ことばをお残しになっていて、例えていうと、「朝、オヒルナッテ〔ご起床になって〕、オトウ〔便所〕にナラシャって、夜のものを納めて、供御のオカチン〔お餅〕を召して」ていうことが。冷泉さんで、昔、そうとう御所ことばをお使いになったんでございましょうか。

冷泉 ババがおりましたもんでございますからね。ずい分古いことを申したらしゅうございすな。

大聖 オババサンは柳原さんから。〔柳原伯爵の女、冷泉^{よしこ}良子さん〕

冷泉 はあ、柳原さんから。

それはやはりずっと、学校で使うことば、夫婦で使うことばと違うらしいんですが。

井口 今は学校教育の年限が長く、つまり6年に3年、9か年の義務教育、どうしても行かなくちゃならないことになると、ちょっと学校教育での標準語教育のために、だんだん、御所ことばが使われないように、その間になってくるように思われますがね。

冷泉 ただ今、わたくしの子供の時分とは、またぜんぜん違いましてございすな。わたくしの孫たちの申しますことばは、もうほんとうに、男か女かわかりませんが。

大聖 学校で「オデエサン」「オタアサン」というと笑われる。

みなさん、室町校^{むろまち}〔京都市中京区にある〕ご出身でアラジャリますがね。

冷泉 室町校が古いのか存じませんけどもな。

「オデエサン」「オタアサン」て、いうそうでございすな。

大聖 ちょうど、この曇華院さんも宝鏡寺さんも室町校出身で。

井口 昔は貴族では、個人教授というか、いろいろ、歌とか、習字とか、あるいは女の方ですと、文学とか、いろんなことを個人的にしっかりした人から、おそわっておられて、学校へはおいでにならない方がございました。

今は大学を出ないと免許状が出んもんですから、学校へ行く。どうしても教育やしつけの方法が変ってきましたので。

冷泉 わたくしの子供たちの折は、やはり学校はそうとう参りまして、ほかのけいこは他のけいこで、いたしておりましたがね。

〔(11) 公家の場合－山本家、§ 86〕

大聖 山本種子^{たけな}さんの方はお広いお屋敷ヤッたらしいですな。

井口 あの太正さん〔太正天皇〕の時に舞姫かなんかにお出になったそうですが、おいくつの時
でございましたか。

山本 19でございました。

井口 舞にお出になるのは、何人位お出になるのですか。

山本 8人始めに選ばれてまして。ご当日は本当につとめますのは5人だけでございます。

大聖 お三方予備に。

井口 そうすと、お舞になるまでに、京都御所かどこかへおいでになって、ご練習なさるわけ
で。

山本 華族会館で。

大聖 催されたのは二条の饗宴場でね、そのときは。

山本 丁度その時、オカミがナラシャリしましたのですけどね。皇后陛下は澄宮・三笠宮をご懐
妊中で、ご降誕月で、オカミだけナラシャリましてね。^{よくとし}翌年、またそのときに、「舞がかわ
いかった」とおっしゃっていただいたそうでございます。皇后陛下には、わたくしたちお舞
したもののだけがね、そのとおりに。

徳大寺 二条城のときは、わたくしも拝見いたしました。

大聖 あのときの侍従長さんはどなたさんでございました？ もうオモウサン、オアシャリま
せなんだもんな。

徳大寺 わたくしはまだ陸軍におりまして。

大聖 さよでござりますか。軍人さんだったんですか。

山本 父はちょうど^{てんぎ}奠儀官でおりまして。それから、いここになります日野西〔日野西資博子爵〕
は宮内省に。

大聖 あなたのお姫さんの時に^ママシャッて〔あなた（山本種子さん）がお嬢さんのときに、大正天
皇のご即位式の五節の舞姫にお出あそばされて〕の意、
^ママシャルは最も高、日野西さんのは、いまのオカミの時〔日野西資博子爵五女兌子さんが、五節の舞
い敬語、§ 74—2〕姫になったのは今上陛下のご即位式の時
でございますな。

山本 さよでございますね。

冷泉 徳大寺さんのおじいさんにお当りあそばす方ですな。明治天皇さんのご陪乗あそばして、
ほんとにお長い間をね。

〔12〕「公家言葉集存」について—§ 87〕

井口 何か伺うと貞明皇后さんが、せっかく御所には昔から御所ことばが伝っているから、記
録して保存したらどうかというようなお心持があったというようなことを拝して、きょうみ
なさんにお目につけた「公家言葉集存」〔§ 25〕をお作りになったというようなことを漏れ承
っているわけなんです。

藤森さん、そういうことですか。

藤森 そんなに、うけたまわりましたね。それで京都側の旧堂上華族方の古いおかたがね。お
いでのかたにご依頼なされまして、そのお家ごとに、ご記憶のある程度のおことばをお出し

願って集収なさって、そのご関係者と連絡して、そのことば集の原稿が出来上ったということになっております。

井口 見せていただくと、大変よくまとまっていますし、名前は「公家言葉」となっておりますが、おそらく内容は御所ことばと同じようなものではないかと存じます。集めるときに、お集りになったかたがたが旧堂上のかた、それから旧女官のかた、それから尼門跡のかたで、いわゆる御所ことばというか、広い意味の公家ことばですね、それが大変よく集っています。わたしたち、公家ことばというものが武家ことばと並んでありそうなものだと思いますが、公家ことばは具体的にどうということばが公家ことば・御所ことばかということがですね、はっきりしていませんでしたけれども、みなさんがたのお力で公家ことばあるいは御所ことばの実態がだんだん解ってきたように思われて、大変ありがたいと思ってるわけでございます。そして、女官のお使いになったことばを「女房ことば」といって、室町時代ごろから、味噌をムシというとか、あるいは豆腐をカベとか、そういうものを記したものがございますけど、単語が20かそこらで、江戸時代になりますと、150ぐらいをのせた婦人教養書の「女重宝記」〔§ 17〕というのがあるんでございますけど、それはみんな単語、しかもものの名前が載っています。そういうことばを女官のかたがお使いになったり、宮中でどういうふう文章の形でお使いになってたかということが、全然わからなかったんでございますけど、まあ、こうしてみなさんがたから御所ことばの実際を伺って、そういうことばがどんなふうにつづり合わされて、使われたかというようなことが、だんだんわかって来たような気がしまして、大変ありがたいことだと思っております。

今まで伺ったのは尼門跡さんのお使いになっていることば、あるいは旧お公家さんがお使いになっていたようなことばを伺っていたわけです。

〔13 旧堂上の公家ことば-§ 88〕

この春、旧堂上の男子のかたがたのお集りのときにですね、公家ことばのことを伺ったん^⑤です。〔筆者は、昭和32年5月、霞会館で、旧堂上会の方々、〕が、その時は、あまり使っていない。一番よく使うのは「ゴキゲンヨウ」ということばですが、この「ゴキゲンヨウ」は、朝・昼・晩、会った時にですね、「ゴキゲンヨウ」と言えればいいわけで、これだけは、さかんに愛用していますとのことでございました。

この他はですね、味噌のことをムシ、お父さんのこととか、お母さんのことをオデエサンとオタアサン、そういうようなことをいっている。あるいは「ゴゼン、こうあそばせ」というような風に、奥方がおっしゃるとかいう程度のお話がありました。自分たちは男で、日本各地を飛んで廻っているので、どうも御所ことばとだいぶ縁が遠くなったから、一つ尼門跡さんとかあるいは公家の方のご婦人がたにお集り願って、お話を伺ったら、もっとたくさんお話を伺えるだろうということでしたが、今日いろいろ伺うと、ずいぶん、まだあるようでございますが。

〔14〕 御所ことば「シャル」「マシャル」-§ 89〕

何かその時では、公家ことばは「アソバセ」ことばであると、というような風におっしゃってましたんですが、こう「アソバセ」というようなことばと、「アラシャル」とかですね、「こうアソバス」よりは「こうアラシャル」というと、いかにも御所ことばの匂がよけいするような気がするんですが。何か使いわけがあるんでございましょうか。

大聖 ありますな、最高ですな、アラシャルとかはな。

オカミがお熱があるということ、オカミがオスルがアラシャル」とかという風に。

徳大寺 それ、京都ことばじゃございせんかね、アラシャル。京都御所では申しませんかね。

井口 徳大寺さん、アラシャルというときのシャルことばは珍しいと思ひましてね、調べましたら、江戸時代前期の上方の作品にですな、「シャル」ということばを使っています。それが江戸の後期になると、「何々なさる」という口ことばに変わって来たらしいんです。それで、御所ことばで「シャル」をよくお使いになるのは、江戸前期ごろ、上方で使われていたことばが御所ことばに残っているわけです。そして、御所ことばの「シャル」は身分の非常に高いオカミがたに対しても使っているということを伺ひまして、たいへん興味深く感じているわけです。御所ことばは京ことばの土台の上に、御所という特殊な高貴なところで、お使いになった単語とか、あるいはことばづかいが加ってできたのではないかと思います。それで、上品とか、丁寧とか、優しいとか、美しいとかいうことが重んじられた、いかにも女らしいことばづかいじゃないかと、そういうふうにいるわけですね。

それで、徳川時代になりますと、やはり世間がだんだん安定して平和になって来まして、この京都のような中心地では、婦人のことばのお手本を御所ことばに求めたいというので、御所ことばを婦人の教養書にのせたりして、広く普及するようになったのではないかと思います。

徳大寺 「いらっしゃる」なんていうことばは、わたくしは子供の時代からよく使っておりましたがね。

井口 「いらっしゃる」ということばですね。シャルは「いらっしゃる」というときだけ、現代の標準語に残っています。

しかし今では、だんだん各地のことばの研究が進んできてましてですね、それを調べた方の報告〔藤原与一博士「入らっしゃる」などの「～シャル」(「～サ」)によりますと、やはり「シャル」ということばは、方言にぼつぼつ残っているらしいんです。方言に残っているシャルは、丁寧さが低いものになっているようです。同じシャルでも、たとえば、「出マシャリまして」のように、「マシャル」というのは「シャル」よりも高い用法で、最高敬語であると思われる。「マシャル」をつけてお使いになっているのには、どんな例がございましょうか。

大聖 「お出まし遊ばされまして」ということを「出マシャリマシテ」とか、「済ませられまして」ということを「済^{じゆぎよ}マシャリマシテ」とか、そのほかに「入御ナリマシャル」「出御ナ

リマシャル」「オミ大キェウナリマシャル」とこういうのですな。ほかにはあまり思い出しません。〔「国語学」33輯,
拙稿 § 10—2〕

〔15〕「サン」と「さま」—§ 90〕

大聖 「ソノゴッサン」（「^{せい}が〔摂家・清華・大臣家以上の主人〕でもですな。字で書いたら、「その御所様」と書くのです。それを「ソノゴッサン」とか「ゴシヨッサン」とか、「様」を「サン」と申します。

井口 「公家言葉集存」を見てみますと、「様」という字にですね、全部「サン」と振りがなしてございますので、「ゴッサン」とか、「大正サン」とか、「明治サン」とかいう「サン」について、先日、堂上のかたのお集りの時に、「サマ」との違いを、いろいろお話し願ったのですが。

大聖 字で書けば「^{さま}様」ですな。御所へ参りましても、^{こうぐう}后宮サンのこと申し上げるのに、女官さんどうしなら、「后宮サマ」とは申し上げませんわ。めいめいどもでな「后宮サン」で申し上げます。オカミのことは「オカミ」と、こう申しあげますけどな。后宮サンのことは「后宮サン」で、こう申しますな。

井口 「后宮サン」あるいは「大正サン」とか、最高の方に「サン」をつけていっているのは、やはりこの京都ことばの「サン」ですね。わたしのことを、東京式に「井之口さん」というときは、「井之口さま」というよりは敬意が低いんです。ところが、京都では、「サン」というのは最高のことばですね。

大聖 そうです。そう感じますな。

井口 公式の表立った時には「さま」とおっしゃいましょうが、内輪の、うちのことば、くだけた御所ことばの最高は、やっぱり「サン」じゃないかという風に、旧堂上の方々のお集りのときに話してみましたんですけど、そうでなくて、御所ことばでも「さん」でなく「さま」であるというかたもございました。

冷泉 武家の方では、「さま」とおっしゃるのですけどな。

大聖 中山の奥サン〔中山三千代さん、
成瀬子爵の女〕がな、成瀬さんから来ておいでになっていて、「オマエサマ」がて、こうおっしゃいますな。ここで、オマエサンで申したら、ずっと下の方でしょ。

冷泉 わたくしの里から松浦へまいってますがね、ご主人にオマエサマで、こう申しますが。よくこちらでは目下にはオマエで、こう申しますな。

大聖 「オマエサン、お食事すませて来たか。」と目下に申しますので、目上に「オマエサマ、オマエサマ」で、こう申しますとな、おかしいなとも思いますな。

〔16〕む す び—§ 91〕

井口 御所ことばの中心にだんだんお話が入っていくようで、お話は尽きないようですが、今まで伺ったことの要点をまとめてみますと、やはり「こうアソバセ」とか、あるいは「アラジャリます」とかですね、そういうことばでしまいを結びます。それによって、特別な御所ことばの胴体といいますか、スタイルといいますか、そういうようなものが出来ていると思

います。東京式に、「そうですね」というように「ね」をつけると、東京語らしくなると考え易いのですが、やはり御所ことばは「アソバセ」とか、「アラシャります」とか、こういうふうには、ことばを結ぶと御所ことばの感じが出てくるんじゃないかと考えますんですけど。山本 柔らかい感じでございますね。

井口 それにオムツ〔お味噌〕とかシロモン〔塩〕とか、御所ことばの単語をまぜてお使いになる。御所ことばは千年の都であった京ことばの上に咲いた花であるというふうに考えられるかと思いますが。いろいろさらにお伺いしたいこともたくさんありますが、おおまかなところは今日これで伺ったと思いますし、時間ももうまいりましたので、一応この程度で、終わらうかと思いますが。どうもいろいろありがとうございました。

[注15] (§ 92)

㊥ この春、旧堂上の男子のかたがた……筆者は、昭和32年5月、霞会館にお集りの旧堂上の元伯爵山科家言^{いゑとき}（明治28年^{なごこと}、京都生）、元子爵清岡長言^{ながこと}（明治8年^{あつひこ}、京都生）、同梅園篤彦^{あつひこ}（明治22年^{ありとも}、京都生）、同唐橋在知^{ありとも}（明治20年^{京都生}）、同日野西資忠^{すけただ}（明治33年^{京都生}）、同藤井敏久^{としひさ}（明治31年^{京都生}）の各氏から、各家使用の公家ことばを聞く集りを持った。

む す び (§ 93)

本稿は次稿で取扱う尼門跡の文字言語生活資料と対をなすもので、音声言語生活資料を次の二つの方面から考察したものである。一は尼門跡古来の伝承として、今日もなお残存する儀礼的な口上を示し、他は尼門跡およびその交際圏にある御所風の言語生活を座談的にとらえようとしたものである。各項の解説にも明らかなように、民間社会とは著るしく異なる、御所中心の閉鎖的・階層社会ともいえる尼門跡において、定型化された言語使用が伝えられ、それをなお忠実に継承している実態を、録音の文字化によって記録して、ここに掲げた。

個人の話法を余すところなく伝えることは至難のことではあるが、記録保存が時間を争うほどの現状でもあるので、一まず本稿ではもっぱら、音声言語生活の資料を記載することに重点をおいた。これによって、今まで全く知られなかった尼門跡の音声言語生活の若干が（宮中における言語使用の若干と共に）明らかになったものと思われる。

本稿を草するに当って、面倒な録音実態調査に積極的かつ好意的に協力下さった大聖寺門跡・宝鏡寺門跡・曇華院門跡、元女官の穂積秀子さん・同山口正子さん、大聖寺の一老さん、また有益な助言を賜った徳大寺実厚元公爵・三品彰英教授・池上禎造教授・樺垣実教授・阪倉篤義助教授・藤森信一郎氏、その他関係各位に、心からお礼を申し上げ、感謝の意を表すものである。（本研究は昭和33年度文部省科学研究費交付金「各個研究」によるものの一部である）

Linguistic research data in *Amamonzeki* Nunnery (III)

In this ecological study of the Court lady speech in *Amamonzeki* nunnery, the authors indicated some styles of ritual greeting and message which contain the numerous court lady words. As the linguistic aspects of court lady speech are very different from our usages, we added here the records of conversation in the court noble's meeting.